

より良い研究は 豊かな国際交流の基礎となる

上武大学・学長／東京医科歯科大学・客員教授 しぶや まさふみ 澁谷正史氏

生物学・医学研究は多くの努力と多くの失敗の上に初めて成り立っている。私の体験からは、大胆な仮説をもとに丁寧な実験を行い、たとえ“失敗”（予想に反している）としても冷静に結果を解析し、理解する、これらを積み重ねる先に、稀に素晴らしい真実を見出すことができると考えている。この稿では、研究のもうひとつの面、“国境を超えた豊かな交流”を、体験を交えて述べたい。

私は34才の時に米国ロックフェラー大学・花房秀三郎教授の研究室に留学し、学ぶことができた。花房研には世界中から癌遺伝子研究を目指した意欲あふれる若者たちが集まり、大変楽しい雰囲気だった。私自身、藤波肉腫ウイルスの癌遺伝子v-fpsの単離と構造解析を行い、Cellなどに論文を発表することができた。

1982年に帰国し10年以上過ぎたころ、韓国のDr. J-S Seoからセミナーの依頼があった。直接の面識は全くなかったが、彼は私と同じ花房研に留学した経験があり、いわば同窓生であった。韓国でのセミナーの後、私達は当時十分な交流がなかった日韓の間に癌会議を作ってはどうか、と話合った。それをもとに私自身がオーガナイザーとなって最初の会議を1996年に横浜で開催し、それがきっかけで両国癌研究の中心メンバー（寺田がんセンター総長、Dr. J-G. Parkソウル大教授）間の正式な調印が行われ、公式の日韓癌会議が発足した。この会議はその後順調に進められている。また、私自身、血管生物学の研究も進めていたことから、日韓の多くの友人と語り合い、Korea-Japan Joint

Symposium on Vascular Biologyを共同で始めることができた。すでに2013年で11年目を迎えており、両国研究者の間のよき交流の場となっている。日本で開催する会議にも多くの韓国研究者が参加するが、韓国で開催される場合には韓国全土から若手研究者が常に200名以上参加し、両国研究者にとってとても和やかで有意義な交流の場となっている。自らの研究の場で努力し、その成果を持ち寄り、互いに尊敬の念をもとにコミュニケーションを計る、そのことが相互理解に素晴らしく役立っている。

国境をこえた研究者同士の率直な交流と共同研究への取り組みは、市民レベルでの相互理解に非常に貢献するものと思う。私自身、これらの機会を通して多くの韓国研究者を友人としてもつことができたし、同様の率直



Korea-Japan Joint Symposium on Vascular Biology 2004 in Awaji-island

な交流のなかから中国、台湾の研究者、また、多くの欧米研究者を友人として得ることができた。私の属する医学研究の領域は数多くこのような素晴らしい場を作ってくれるものであり、そのことに深く感謝している。若手研究者の皆さんも、是非、優れた研究の上に豊かな国際交流を計り、友情を築いていかれることを期待している。



澁谷 正史氏

1970年 東京大学医学部医学科卒業、東京大学付属病院内科で臨床研修
1979年 米国ロックフェラー大学留学
1982年 帰国、東大医科研、助教授
1990年 同 教授
2007年 定年退職、東京大学名誉教授
2008年 上武大学副学長（2009年3月まで学長代行）
2013年 同 学長

受賞歴／日本癌学会学術賞吉田富三賞、高松宮妃癌研究基金学術賞
所属学会／日仏がん会議オーガナイザー（1996-2003）、日韓がん会議オーガナイザー（1996-2000）、
日韓血管会議オーガナイザー（2004）、Vascular Medicine 学会会長（1998）、
日本血管生物医学学会会長（2004）
専門分野／がん遺伝子、血管新生、VEGF受容体

今回は

京都大学医学研究科
分子腫瘍学領域・教授
野田 亮氏へ
バトンタッチします。